



特249

79

二十三年三月
教科書局國語課編

五十音順
当用漢字音訓表

付録
義務教育で読み書きともに教える漢字——現代
かなづかいの要領——内閣訓令——同告示

文
部
省

始



いぬ いな いと なむ
いと ねむ
いつつ
いつつ
イツ
いちじるしい
いち
イチ
いたる
いたむ
いただき
いた
いそぐ
いそがしい
いすみ
いしずえ
いし

犬否營糸 五一著市卷一至 板急 石

偽逸 痛頂 忙泉礎

いね
いのち
いのる
いま
いましめる
いむ
いも
いもうと
いやしい
いる
いろ
いわ
いわり
イン

飲院員因印引祝岩色居入 妹 今 命

韻隱陰烟 鑄射卑 芋忌戒 祈 稻

うた・うたり
うすい
うしろ
うしなう
うし
うごく
うける
うけたまわる
うかぶ・うく
うかがう
うお
うえる
うえ
ウ
イン
[う]

歌 後失氏半動受承 魚植上雨右有 音

薄 請 浮伺 飢 羽字

うやまう
うめる
うめ
うむ
うみ
うまれる
うばう
うながす
うで
うつわ
うつる
うったえる
うつす
うつくしい
うち
うたがう
うたい

敬 産海生馬 器移 写美討打内疑

埋梅 奪促腕 映訴 撃 謠

あね あに あなどる
あな
あと
あてる
あつまる
あつかう
アツ
あたる
あたらしい
あたま
あたたかい
あたい
あそぶ
あせ

姉兄 集 熱暑厚任当新頭 價遊

侮穴跡充 扱 暖興値 汗

あらわす
あらためる
あらた
あらう
あらう
あゆむ
あやまる
あやしい
あやうい
あめ
あむ
あみ
あまる
あまい
あま
あぶら
あびる

著表改新争 歩誤 雨天編 余 油浴

洗荒 怪危 網 甘尼

イ
[5]
アン
アン
あわれ
あわい
あれる
あるく
ある
あらわれる

委易医位朋衣以 行暗案安 步有現

維違爲偉尉威依 哀淡荒

いさましい
いさぎよい
いけ
いく
いく
イク
いきる
いきどおる
いきおい
いき
イキ
いかる
いえ
いう

勇潔池行 育生 勢息 家言 遺意異移胃

幾 憤 域怒 井 緯慰

ク キン* キン きわめる
 [く]

苦供句区工九口 銀今 禁勤金均近 着
 馭 吟 謹緊琴筋菌斤窮
 くだく くだ くだせ くだすり くらら くらさる くらさり くらさい くらさ くらき グウ グウ くらいる グ ク*

下 管 藥 草 宮食空 具功宮久
 碎 癖 鯨腐鎖臭 莖遇偶 悔愚 紅
 くるしい くるう くる くらべる くらす くらら くらら くらら くら やむ くらもる くらも くらむ くらび くらばる くらに クツ くらち

苦 來比 暗位藏倉 雲組首配國 口
 狂線 暮 悔曇 掘屈朽
 けケ* ケ [け] グン クン くらわたる くらわしい くらわえる くらわ くらろ・くらろい くられる くられない くらま

毛仮化氣家 群郡軍訓君 加 黒 車
 懸 動薰企詳 桑 暮紅

岸 開 消 議疑義技黃木生機器旗貴期
 刻 菊 犧擬儀戲偽欺宜 騎輝幾棄
 きし きさむ きく キク きえる ギ き

岸 開 消 議疑義技黃木生機器旗貴期
 刻 菊 犧擬儀戲偽欺宜 騎輝幾棄
 キュウ キヤク キヤク きも きめる きみ きぬ キツ キチ きたえる きた きそら きすく きす

求休旧久九逆 客 決君絹 北競築
 朽吸丘及弓虐脚却肝 喫詰吉鍛 傷
 キョウ キョウ キョウ ギョウ キョウ

協京供共清漁魚 許拳居去牛給球救級宮急究
 況狂叫凶 御拋距虛拒巨 窮糾泣
 きり ギョク キョク ギョウ キョウ

切 玉極局曲形業行兄 競鏡興橋境經強教
 霧 曉凝仰 響驚郷胸脅狹恭恐峽享

シ ヨ ウ
ジ
シ

承相招正生少小除序助女諸暑書所初処
松肖床抄匠召升 叙徐如 緒署庶邊潤循

燒賞照証勝象章商唱称消省昭

障詳傷焦硝詔掌紹粧晶祥將姓訟症笑涉裝沼昇
ジ ヨ ウ ジ*

定場條情常乘狀上星青政精性

壘鑲錠蒸剩淨城冗丈 井鐘償礁衝獎彰

シ シ シ シ し し ジ シ ジ*
ン ろ ろ ろ ろ ろ ヨ ヨ ヨ
 し し し り ら ク ク ウ
 ゑ べ る
 べ る
 べ る
 べ る
 べ る
 べ る
 べ る
 べ る
 べ る
 べ る
 べ る
 べ る

新臣申心白 印知退調 職織植食色靜成
振侵辛伸 城 辱 囑飾触殖 盛釀讓

シ ャ
し も
し め る
し め る
し ま る
し め す
し ま
し ぼ る
し ぶ ・ し ぶ い
し ば る
し ば
し の ぶ
し め
し な
ジ ャ ジ ャ

写 下 示 鳥 死 品 実 日 質 室
砂 霜 濕 占 絞 締 絞 濫 縛 芝 忍 濕 漆 執

シ ャ
ユ ジ ャ シ* シ ャ ジ ャ
 ク ク ク ク ク

種酒首取守主手 弱赤石 釈借 者謝社會車

趣殊珠狩朱寂若 昔爵尺勺邪煮斜捨赦射
ジ ャ シ ジ* ジ シ*
 ャ ャ ャ ャ
 ャ ャ ャ ャ
 ャ ャ ャ ャ
 ャ ャ ャ ャ

十集就終衆週習修秋拾宗周收州就需授受衆修

充 執製醜酬愁臭秀舟囚 樹壽儒
ジ シ ジ シ ジ シ
 ャ ャ ャ ャ ャ ャ
 ャ ャ ャ ャ ャ ャ
 ャ ャ ャ ャ ャ ャ
 ャ ャ ャ ャ ャ ャ

準順純 春術述出 宿祝 從重拾住
准殉盾巡旬瞬俊 熟縮肅淑叔獸縱濫銃柔

世正西成声制性青政省星清晴勢聖精製誠靜整

征性盛婿誓請

ゼツ

セツ
セキ

セキ
ゼイ
ゼイ
ゼイ

稅說夕石赤席責積績関切折接設雪說節舌絶

歳斥析昔隻借跡籍拙窃攝

ゼン

セン
せめる
せまる
せまい
せに

錢責千川先宣浅專船錢線戰選全前善

狹迫攻占洗染泉扇旋踐銑潜遷薦鮮織漸禪繕

ソウ

ソ

〔そ〕

然祖素組早走宗爭草相倉送創

阻租粗措疎訴壘礎雙壯奏桑莊掃巢喪

ス

ジ
ン
シ
ン*

〔す〕

素

人仁神

身信眞神深森進親

浸針娠紳診慎寢審震薪請及迅陣尋盡

ス
ズ*
ズ
ス
ズ*

州子主守 囟頭 水推

醱巢 豆吹炊垂帥衰睡穗遂粹醉錘

ズイ
ズイ
スウ
すう
すがた
すきる
すく
すくう
すくない
すけ
すこし
すこやか
すじ
すず
すずしい
すすむ

出数末過一救少助少健進

隨髓樞崇吸姿好透筋鈴涼

すすめる
すでに
すてる
すな
すべる
すみ
すむ
する
する
するとい
スン
セセ
ゼイ

〔せ〕

世是生

勸統炭住濟刷

施背畝瀨井

既捨砂墨澄 鋭寸

て
テ
つむ
つむぐ
つめたい
つめる
つもる
つゆ
つよい
つらなる
つらぬく
つる
つるぎ
つれる
〔て〕

弟体低丁手 連 連強 積 冷 積
 抵邸廷呈 劍弦貫 露 詰 紡摘錘
 テでてて
ンるるら テ ヲ テキ

店典天出照寺 鉄適敵的 程提停庭底定
 殿添 徹撤哲迭滴摘笛締艇堤運貞訂帝
 ト ドとト* ト デン
 [と]

冬刀度努土戸登 都徒凶土 電傳田轉展点
 到豆 怒奴 塗渡途吐斗 殿
 と ト*
ウ

問納 頭燈統答等登湯党討鳥東投当
 騰圖騰籍踏稻盜塔筒痘悼陶透逃桃唐凍倒

チ ョウ
ウ
チ ョ
ウ
チ ャ
ウ
チ ャ
ウ
チ ツ
ウ
ち ち
む
ち ち
む
チ ク
ち ぎ
る

町丁著貯晝柱注忠虫中着茶 父 築竹
 兆弔 鑄駐裏抽宙仲嫡 壺秩縮乳蓄畜逐契
 チン ちる チョク

質散直 調腸朝鳥張帳重長
 鎮陳朕珍沈 勅廳聽懲澄潮微跳脹超彫頂
 つける つくろう つくる つぐなう つくす つくえ つぐ つく つき つかれる つかえる つかう ツウ ついやす ツイ ツ*

告付 作造 次着月 仕使通費追対 都
 繕 償盡机継突 疲 痛 墜津
 つみ つま ぼ ぶ ばさ つのる つのね つな つとめる つとめ つむみ つつみ つつしむ つつ ち つたえる

罪妻 角常 努勤務包 統 土傳
 坪粒翼募 網 鼓堤慎 筒

にけらむ	にくむ	ニク	にぎる	にがい	に	ニ*	ニ	ナ	なれる	なる	ならべる	ならびに	ならう
[に]													
肉 苦荷兒武二				難南男慣成鳴				習					
逃憎		握		尼				軟		並		並	
ぬし	ぬぐ	ぬく	ぬう	ニ	にわとり	にわ	にる	ニヨウ	ニヨ	ニウ	にぶい	ニチ	にし
[ぬ]													
主		認任人				庭似		女		入		日西	
脱拔縫		忍妊鷄				煮尿如		柔乳鈍		濁			
ネン	ネン	ねる	ねむる	ねばる	ネツ	ねがう	ネイ	ね	ぬる	ぬま	ぬの	ぬすむ	ぬすむ
[の]													
然燃念年練				熱願				根音		布			
粘寢眠粘		寧		値		塗沼		盜					
のる	のむ	のぼる	のべる	のべる	のち	のぞむ	のぞく	のせる	のこる	のき	ノウ	の	の
[は]													
乘飲登上述延延後臨望除				殘		農能納野							
伸				載		軒濃腦惱							

ドク	とく	トク*	トク	とき	とおる	とおい	とお	とうげ	ドウ
毒説解読徳得特時通遠十 導銅道働童堂動同									
篤督匿					峠			胴	
とむ	とまる	とぼしい	とぶ	どの	どの	となり	となえる	とのおる	とどける
とむ	とまる	とぼしい	とぶ	どの	どの	となり	となえる	とのおる	とどける
富止 飛 唱整 届 年所 読独									
泊乏		殿殿隣		滯		突閉		床遂溶	
ない	ナイ	な	ナ*	ドン	トン	とる	とり	とらえる	ともなう
[な]									
無内菜名納				取採鳥			共供友留		
曇鈍豚		執		捕伴		弔			
なやむ	なみだ	なみ	なまり	なま	なに	ななめ	ななつ	なさけ	なげく
なやむ	なみだ	なみ	なまり	なま	なに	ななめ	ななつ	なさけ	なげく
波 生何 七夏情投 鳴流半長中直									
惱涙並鉛		斜		嘆慰泣		伸 苗			

ホウ ボ* ホ ぼ ぽ べん

[ほ]

放包方 墓母 補保歩 勉便弁編変
宝芳邦模簿暮慕募穂帆舗浦捕 遍

ボウ ホウ

暴質望防 豊報法

剖房忘妨冒坊忙乏亡封縫飽訪崩傲砲峰胞抱奉
ボツ ホツ ほそい ほす ほし ほこる ボク ホク ほがらか ほか ほうむる

発細 星 牧木北 外

没 干 誇墨撲 朗 葬膨謀紡棒傍帽某肪
ま マ ボン ホン ほろびる ほる ほまれ ほのお ほね ほどこす ほとけ ほっする

[ま]

間眞 本 佛欲

魔摩麻 盆凡飜奔滅彫掘營炎骨施

フ . フ ビ*ビ
ン

[ふ]

無部武分 婦富負府布付父夫不 貧便
舞侮譜賦膚敷怖腐符普浮赴附扶 敏

ふち ふたつ ふたたび ぶた ぶだ ぶせぐ ぶせる ぶし ぶくむ ぶくろ ぶく フク ふかい ふえ フウ

二再 防 節 複福復副服深 風歩

縁 豚札 伏 含袋吹 覆腹幅伏 笛封
ブン フン ふれる ふるう ふるい ふる ふゆ ふむ ふね ふとい ふで ブツ フツ

文分 奮粉分 奮古 冬 船太筆物佛

噴墳憤紛触震 降振 踏舟 沸拂
ヘン へる べに ベツ へだてる へき べい へい [へ]

返辺減経 別 米 陞兵平 閉

偏片 紅 隔壁辭 弊幣閉柄併並丙

結 虫 報 向 麦 向 武 無 務 民 見 命 明
 娘 蒸 婿 昔 迎 霧 夢 矛 眠

め ぐ め め
 めくら めむ めイ め
 めく めむ めい め
 めく めむ めい め
 めく めむ めい め
 めく めむ めい め
 めく めむ めい め
 めく めむ めい め

鳴 盟 迷 明 命 名 芽 目 室 群 群 村 六

盲 惠 銘 雌 紫 胸 旨
 むらさき むらさき むらさき
 むらさき むらさき むらさき
 むらさき むらさき むらさき
 むらさき むらさき むらさき
 むらさき むらさき むらさき
 むらさき むらさき むらさき
 むらさき むらさき むらさき

申 設 望 毛 綿 面 飯 巡

め ぐ め め
 めくら めむ めイ め
 めく めむ めい め
 めく めむ めい め
 めく めむ めい め
 めく めむ めい め
 めく めむ めい め
 めく めむ めい め

森 物 者 求 基 基 元 下 最 持 物 用 目 木 燃
 漏 盛 催 桃 若 黙

混 貧 增 交 誠 孫 負 牧 曲 任 前 參 妹 每 米

巻 幕 膜 紛 舞 埋 枚
 まつ まつ まつ まつ
 まつ まつ まつ まつ
 まつ まつ まつ まつ
 まつ まつ まつ まつ
 まつ まつ まつ まつ
 まつ まつ まつ まつ
 まつ まつ まつ まつ

迷 守 招 学 眼 的 政 祭 全 待 末 町

蘭 豆 幻 免 惑 窓 松 又
 みせ みせ みせ みせ
 みせ みせ みせ みせ
 みせ みせ みせ みせ
 みせ みせ みせ みせ
 みせ みせ みせ みせ
 みせ みせ みせ みせ
 みせ みせ みせ みせ

店 自 湖 水 短 右 幹 実 身 味 未 満 万 回

め ぐ め め
 めくら めむ めイ め
 めく めむ めい め
 めく めむ めい め
 めく めむ めい め
 めく めむ めい め
 めく めむ めい め
 めく めむ めい め

名 都 脈 宮 耳 実 南 港 緑 認 三 満 導 道
 妙 峰 醜 源 皆 密 乱

よろこぶ
よわい
よる
よる
よめ
よむ
よぶ
よつ
よそ
よし
よこ
ヨク
よう

弱喜寄因夜 読 四 由横 欲浴

嫁 呼 装 翼翌抑醉擁謡
リ リ リ
ツ ク キ
リ
ラ ラ ラ
ン ク イ
〔り〕

立陸力 理里利 樂落 來

裏離履痢吏 覽欄濫乱卵酪絡頼雷裸
リ リ*
ヨ ヨ
ク ウ
リ リ
ヨ ヨ
ウ ク
リ リ
ユ ヤ
ウ ク

縁力漁 領量料良両 旅 留流略率律

糧療寮僚陵獵涼了慮虜硫隆粒柳
レ イ
ル イ
ル*
リン
〔れ〕 〔る〕

例冷礼令 類流留 臨輪林

麗齡隸靈鈴零励 壘累涙 鈴隣倫厘

もんめ
もん
もれる
〔や〕
ヤ
や
ヤク
やく
やさしい
やしなう
やしろ
やすい

安社養 燒藥訳約役屋家野夜 問門文

優 躍 矢 匂 紋漏
ユイ ユ
〔ゆ〕
やわらかい
やむ
やまい
やま
やぶれる
やぶる
やなき
やどる
やとう
やど
やすむ
やつ

湯輪油由 和 病病山敗破 宿 宿八休

唯 諭愉 柔 柳 雇
ゆめ ゆみ ゆび
ゆたか
ゆく
ゆき
ゆか
ゆう
ゆう
ユイ
ユ*

指豊 行雪 結夕 遊勇有由右友遣

夢弓 護 床 憂融優誘猶裕雄幽郵
ヨウ
よい
よ
ヨ
ゆるす
ゆれる
〔よ〕

曜養様陽葉容要洋用良夜世代預余予 許

踊窳搖腰浴揚庸幼羊 營與 搖

レキ レツ	レン	ロ ロウ	ロク
列歴	練連	路	録六
劣曆	恋烈	郎浪	漏楼廊郎
ロク*	「わ」	ワク	わたくし
論縁	和話	別	私綿
わたる	我悪	若賄	忘煩
わらう	灣腕	沸惑	
わるい	割笑渡		
わける			
わざわい			
わすれる			
わすらしい			
わかれる			
わかい			
ワイ			
わく			
わけ			
わける			
わたくし			

現代かなづかいの要領

・ゴシックはとくに注意すべき点を示す。
・括弧内の漢字には当用漢字表以外のものも使っている。

「現代かなづかい」まえがき

- 一、このかなづかいは、大体、現代語音にもとづいて、現代語をかなで書きあらわす場合の準則を示したものである。
- 一、このかなづかいは、主として現代文のうち口語体のものに適用する。
- 一、原文のかなづかいによる必要のあるもの、またはこれを変更しがたいものは除く。

原則

第一類

- 1. 旧かなづかいの^ゐゐ、^ゑゑ、^ををは、今後、い、え、おと書く。

ただし、助詞「を」は、もとのままとする。

例 あい(藍) いる(居る) すいどう(水道) こえ(声) うえる(植ゑる) こうえん(公園)

とお(十) あおい(青い) おんど(温度)

▼本を読む 字を書く

2. 旧かなづかいの く、ぐ、は、今後か、がと書く。

例 かがく(科学) かし(菓子) ゆかい(愉快) がいこく(外国) いちがつ(一月)

3. 旧かなづかいの ぢ、づ は、今後じ、ぢと書く。

ただし、(イ)二語の連合によって生じたぢ、づ (ロ)同音の連呼によって生じたぢ、づ は、もとのままとする。

例 ふじ(藤) はじる(恥ぢる) じ(痔) じしん(地震) じょせい(女性) みず(水) ゆずる(譲る) まず(先づ) ずつ(宛) なかんすく(就中) さかすき(杯) きずく(築く) だいナ(大豆) ずが(図画)

▼(イ)はなぢ(鼻血) もらいぢぢ(もらひ乳) ひぢりめん(緋縮緬) ちかぢか(近々) い

れぢえ(入知恵) ちゃのみぢゃわん(茶飲茶碗) みそづけ(味噌漬) みかづき(三日月)

ひきづな(引綱) つねづね(常々)

—ぢから(力) —ぢよろちん(提灯) —ぢよろし(調子)

—づえ杖) —づか(塚・束・柄) —づかい(使) —づかえ(仕) —づかみ(掴み) —づかれ(敷れ)

—づき(付・搦) —づく(付く) —づくえ札) —づくり(作・造) —づくし(盡し) —づけ(付) —

づた(蕪) —づたい(傳ひ) —づち(礎) —づつ(筒) —づて(傳手) —づつみ(包) —づつみ(鼓)

—づとめ(動) —づま(妻・妻) —づまる(詰まる) —づみ(積) —づめ(爪・詰) —づよい(強い)

—づら(面) —づらい(辛い) —づり(釣) —づる(鶴・弦・蔓) —づれ(連)

▼(ロ)ぢぢむ(縮む) ぢぢらす(縮らす) つづみ(鼓) つづら(萬籥) つづく(続く) つ

づる(綴る)

4. ㄱ、イ、ウ、エ、オに発音される旧かなづかいのは、ひ、ふ、へ、ほは、今後わ、い、り、え、おと書く。

ただし、助詞「は」「へ」は、もとのままだに書くことを本則とする。

例 かわ(川) あらわな(洗はない) すなわち(則ち) たい(鯛) おもいます(思ひます)

ついに(遂に) いう(言ふ) あやうい(危い) まえ(前) すくえ(救へ) さえ(さへ) か

お(顔) なお(尙・猶) こおり(氷) とおる(通る) おおい(多い) おおきい(大きい)

とおい(遠い) おおう(覆ふ) おおかみ(狼) とどこおる(滞る) おおむね(概ね)

▼わたくしは ではなくは とは のは からは よりは のではこそは までは は かりは だけは ほどは ぐらひは などは あるいは もしくは おそらくは ねがわ

くは おしむらくは または さては いずれは ついては

▼京都へ歸る ……さんへ

5. オに発音される「ふ」は、今後「お」と書く。

例 あおい(葵) あおぐ(仰ぐ) あおる(煽る) たおす(倒す)

第二類

1. ヌの長音は、「ゆ」リと書く。

例 ゆうがた(夕方) ゆうじん(友人) リゆう(理由)

〔備考〕「言ふ」は「いう」と書き、「ゆう」とは書かない。

2. エ列の長音は、エ列のなかに「え」をつけて書く。

例 ええ(應答の語) ねえさん(姉さん)

3. オ列の長音は、「おう」「こう」「そう」「とう」のように、オ列のなかに「う」をつけて書くことを本則とする。

例 おうじ(王子) おうぎ(扇) おうみ(近江) かおう(買はう) こうべ(神戸) こう(斯う)
なごう(長う) いちごう(一合) はなごう(話さう) そう(然う) そろろ(候ふ) ぞう
きん(雑巾) とうげ(峠) たとう(立たう) とう(塔) きのう(昨日) ほうき(箒) ほう

び(褒美) リっぽう(立法) あそぼう(遊ぶ) もうす(申す) ようやく(漸く) たいよ
う(太陽) かえろう(帰らう) ろうそく(蠟燭)
〔備考〕「多い」「大きい」「氷る」「通る」「遠い」などは「おおい」「おおきい」「こおる」「とおる」「とおち」「とおち」と書き、「おうち」「おうき」「こおる」「とる」「とる」とは書かない。

第三類

ウ列拗音の長音は、「きゅう」「しゅう」「ちゅう」「にゅう」のようにウ列拗音のなかに「う」をつけて書く。

例 おおきゅう(大きい) きゅうよ(給與) あたらしゅう(新しう) きゅうり(胡瓜) きゅう
しゅう(九州) じゅう(十) うちゅう(宇宙) にゅうがく(入学) ひゅうが(日向) ごび
ゅう(誤謬) りゅうこう(流行)

第四類

オ列拗音の長音は、「きょう」「しょう」「ちよう」「にょう」のように、オ列拗音のなかに「う」をつけて書くことを本則とする。

例 とうきょう(東京) きょう(今日) こんきょう(今晚) しょうねん(少年) まいりまし
う(参りませう) よいでしやう(よいでせう) じょうず(上手) ちよう(蝶) によ

う(尿) ひょう(豹) びょう(鏝) みょうにち(明日) みょうじ(苗字) りょうり(料理)
りょう(猟)

〔注意〕

1. 「クワ・カ」「グッ・ガ」および「チ・ジ」「ヅ・ズ」をいい分けている地方に限り、これを書き分けてもさしつかえない。
2. 拗音をあらわすや、例、よは、なるべく右下に小さく書く。
3. 促音をあらわすつは、なるべく右下に小さく書く。

内閣訓令・同告示

内閣訓令第七号

当用漢字表の実施に関する件

各 官 廳

従来、わが國において用いられる漢字は、その数がはなはだ多く、その用いかたも複雑であるために、教育上また社会生活上、多くの不便があった。これを制限することは、國民の生活能率をあげ、文化水準を高める上に、資するところが少くない。

それ故に、政府は、今回國語審議會の決定した当用漢字表を採択して、本日内閣告示第三十二号をもって、これを告示した。今後各官廳においては、この表によって漢字を使用するとともに、廣く各方面にこの使用を勧めて、当用漢字表制定の趣旨の徹底するように努めることを希望する。

昭和二十一年十一月十六日

内閣総理大臣 吉 田 茂

内閣告示第三十二号

現代國語を書きあらわすために、日常使用する漢字の範囲を、次の表のように定める。

昭和二十一年十一月十六日

内閣総理大臣 吉 田 茂

当用漢字表

まえがき

- 一、この表は、法令・公用文書・新聞・雑誌および一般社会で、使用する漢字の範囲を示したものである。
- 二、この表は、今日の國民生活の上で、漢字の制限があまり無理がなく行われることをめやすとして選んだものである。
- 一、固有名詞については、法規上その他に關係するところが大きいので、別に考えることとした。
- 一、簡易字体については、現在慣用されているものの中から採用し、これを本体として、参考のため原字をその下に掲げた。
- 一、字体と音訓との整理については、調査中である。

使用上の注意事項

- イ、この表の漢字で書きあらわせないことは、別のことばにかえるか、または、かな書きにする。
 - ロ、代名詞・副詞・接続詞・感動詞・助動詞・助詞は、なるべくかな書きにする。
 - ハ、外國（中華民國を除く）の地名・人名は、かな書きにする。
- ただし、「米國」「英米」等の用例は、從來の慣習に従ってもさしつかえない。

ニ、外來語は、かな書きにする。

ホ、動植物の名称は、かな書きにする。

ヘ、あて字は、かな書きにする。

ト、ふりがなは、原則として使わない。

チ、専門用語については、この表を基準として、整理することが望ましい。

(本表 略)

内閣訓令第八号

各 官 廳

「現代かなづかい」の実施に関する件

國語を書きあらわす上に、從來のかなづかいは、はなはだ複雑であつて、使用上の困難が大きい。これを現代語音にもとづいて整理することは、教育の負担を軽くするばかりでなく、國民の生活能率をあげ、文化水準を高める上に、資するところが大きい。それ故に、政府は、今回國語審議会の決定した現代かなづかいを採択して、本日内閣告示第三十三号をもって、これを告示した。今後各官廳においては、このかなづかいを使用するとともに、廣く各方面にこの使用を勧めて、現代かなづかい制定の趣旨の徹底するように努めることを希望する。

昭和二十一年十一月十六日

内閣總理大臣 吉 田 茂

内閣告示第三十三号

現代國語の口語文を書きあらわすかなづかいを、次のように定める。

昭和二十一年十一月十六日

内閣総理大臣 吉田 茂

現代かなづかい

まえがき

- 一、このかなづかいは、大体、現代語音にもとづいて、現代語をかなで書きあらわす場合の準則を示したものである。
- 一、このかなづかいは、主として現代文のうち口語体のものに適用する。
- 一、原文のかなづかいによる必要のあるもの、またはこれを変更しがたいものは除く。

(本表 略)

内閣訓令第一号

各官廳

当用漢字別表の実施に関する件

さきに、政府は、現代國語を書きあらわすために日常使用する漢字の範囲を定め、昭和二十一年内閣告示第三十二号をもって、当用漢字表を告示した。しかしながら、これは、國民生活の上で漢字の制限が無理がなく行われることをめやすとしたものであって、國民教育における漢字學習の負

担を軽くし、教育内容の向上をはかるためには、わが國の青少年に対して義務教育の期間において読み書きともに必修せしめるべき漢字の範囲を定める必要がある。

よって、政府は、今回國語審議會の決定した当用漢字別表を採択し、本日内閣告示第一号をもって、これを告示した。今後、各官廳においては、この表を制定した趣旨を理解し、これに協力することを希望する。

昭和二十三年二月十六日

内閣総理大臣 片山 哲

内閣告示第一号

当用漢字表の中で、義務教育の期間に、読み書きともにできるように指導すべき漢字の範囲を、

次の表のように定める。

昭和二十三年二月十六日

内閣総理大臣 片山 哲

当用漢字別表

この表の漢字は、当用漢字表の中で、義務教育の期間に、読み書きともにできるように指導することが必要であると認められたものである。

(本表 略)

内閣訓令第二号

各官廳

当用漢字音訓表の実施に関する件

さきに、政府は、現代國語を書きあらわすために日常使用する漢字の範囲を定め、昭和二十一年内閣告示第三十二号をもって、当用漢字表を告示した。しかしながら、漢字を使用する上の複雑さは、その数の多いことによるばかりでなく、その読みかたの多様であることにもよるのであるから、当用漢字表制定の趣旨を徹底させるためには、さらに漢字の音訓を整理することが必要である。

よって、政府は、今回國語審議会の決定した当用漢字音訓表を採択して、本日内閣告示第二号をもって、これを告示した。今後、各官廳においては、つとめてこの表によって漢字を使用するとともに、廣く各方面に、当用漢字音訓表制定の趣旨の徹底するように努めることを希望する。

昭和二十三年二月十六日

内閣總理大臣 片 山 哲

内閣告示第二号

現代國語を書きあらわすために、日常使用する漢字の音訓の範囲を、おおむね次の表のように定める。

昭和二十三年二月十六日

内閣總理大臣 片 山 哲

当用漢字音訓表

まえがき

一、この表は、当用漢字表の各字について、字音と字訓との整理を行い、今後使用する音訓を示したものである。

一、この表の字音は、漢音・吳音・唐音および慣用音の区別にかかわりなく、現代の社会にひろく使われているものの中から採用した。

一、この表の字訓は、やはり現代の社会にひろく行われているものの中から採用したが、異字同訓はつとめて整理した。

一、音訓の掲げ方は、まず字音をかたかなで、つぎに字訓をひらがなで示した。

なお、限られたことばにのみ用いられるものには、傍線をつけておいた。

〔使用上の注意事項〕

イ、自動詞にも他動詞にも使われるものについては、おおむねその一方の形のみを掲げてあるが、両様に使ってさしつかえない。

例

減 ほろびる↓ほろぼす 落 おちる↓おとす

集 あつままる↓あつめる 加 くわえる↓くわわる

折 おる↓おれる 染 そめる↓そまる

ロ、形容詞・形容動詞・動詞の中の二つ以上に使われるものについては、おおむねその中の一つ

の形のみを掲げてあるが、両様あるいは三様に使ってさしつかえない。

例

怪 あやしい↓あやしむ 樂 たのしい↓たのしむ
憎 にくむ↓にくらしい 確 たしか↓たしかめる
晴 はれる↓はれやか 暖 あたかい↓あたたか・あたためる
清 きよい↓きよらか・きよめる

ハ、動詞にも名詞にも使われるものについては、おおむね動詞の形のみを掲げてあるが、名詞に
使ってさしつかえない。

例

光 ひかる↓ひかり 祭 まつる↓まつり
組 くむ↓くみ 補 おぎなう↓おぎない
誓 ちかう↓ちかい 肥 こえる↓こえ

ただし、「務つとめ」「氷とおり」「謡うたい」のように、名詞の形のみを掲げてあるものは、
動詞には使わない。

二、つぎのような熟字は、使ってさしつかえない。

木 き↓木立 こだち 目 め↓目深 まぶか 金 かね↓金物 かなもの

雨 あめ↓雨戸 あまど・春雨 はるさめ 何 なに↓何時 なんどき
十 ジュウ↓十銭 ジッセン 合 ゴウ↓合併 ガッペイ
皇 オウ↓天皇 テンノウ 寸 スン↓三寸 サンズン
発 ハツ↓出発 シュツパツ 夫 フ↓夫婦 フウフ

(本表略)

終